

# 草刈貝塚出土の小玉について

福田 依子

## 1. はじめに

市原市草刈に所在する草刈貝塚は、「草刈遺跡B区」として既に報告されている縄文時代中期の環状集落である。今年度、残るB区の西側をH区として調査し、9年の歳月を隔ててついに集落のほぼ全容を見るに至ったわけである。中でも特に注目されるのが外沿部に廻る住居内貝塚で、遺構の性格上多くの貴重な資料を提供してくれた。今回、その住居内貝塚からいわゆる滑石製の小玉が出土した。より多くの方に類例をご教授頂ければ幸いと思い、ここに紹介すると共に、その遺構について若干の私見を述べてみたい。

## 2. 遺跡の位置と環境

集落が形成された台地は東西に長い独立丘陵で、村田川とその支流によって開析された谷に囲まれている(標高約24~35m)。時期的には阿玉台式期から加曽利E式期にまたがっており、つまり海進最高期直後から集落の形成が始まったわけである。

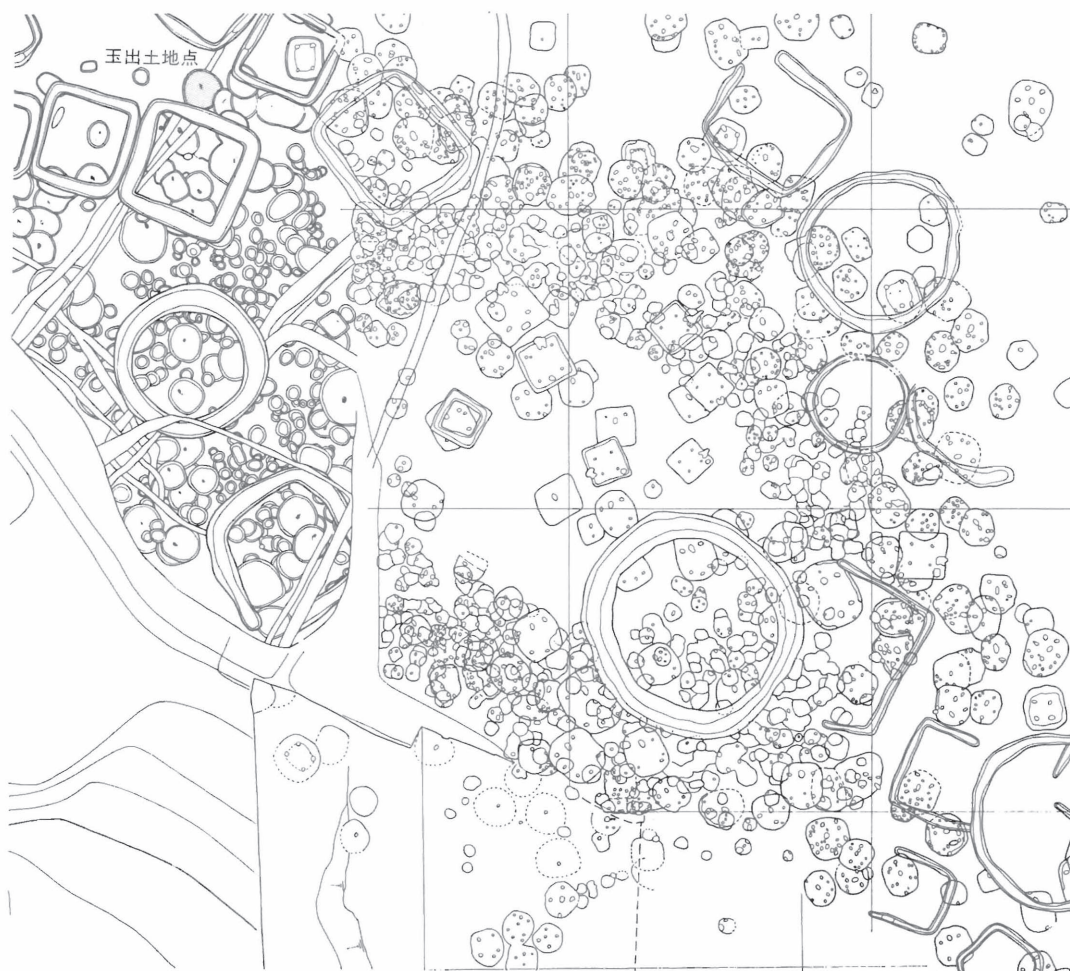
地質ボーリングによる調査では、海進期の浸食で内陸へ入り込んだ谷が、海水面の低下によって泥炭層化したのに伴い、急激に埋め立てられ湿原化した様子が明らかになっている(註<sup>1</sup>)。足下に湿原を見下ろして、南へ200mも行くと海岸が広がっている当時の景観が思い浮かばれる。砂泥性の土が堆積した沿岸部では、潮間帯の砂地に棲息する貝類が群棲するようになり、ハマグリ、シオフキ、キサゴなどが貝塚の主体を占めている。

集落が形成された台地そのものが狭い上に、なおも北側に余地を残して崖淵に生活の場を求めるのは、何らかの必要性があつたのことと思われる。その理由の一つとして、最も無理なく考えられるのが斜面貝層の存在であるが、後世に斜面を削られるなどしており、残念ながら今のところ明確な形での確認はされていない(註<sup>2</sup>)。斜面貝層と住居内貝塚が同時に存在する事についての問題点は改めて考えねばならないが、斜面貝層が存在する可能性は十分あると思われる。



第1図 周辺の主要遺跡 (1:25,000)

1. 草刈貝塚
2. 菊間遺跡
3. 大庭遺跡
4. 西山遺跡
5. 川焼台遺跡
6. 鶴牧遺跡



第2図 遺跡全体図 (1:1,000)

### 3. 遺跡の概要 (第2図)

集落は、前述した様に環状の外側から形成されており、大きく以下の様な傾向に分けられる。

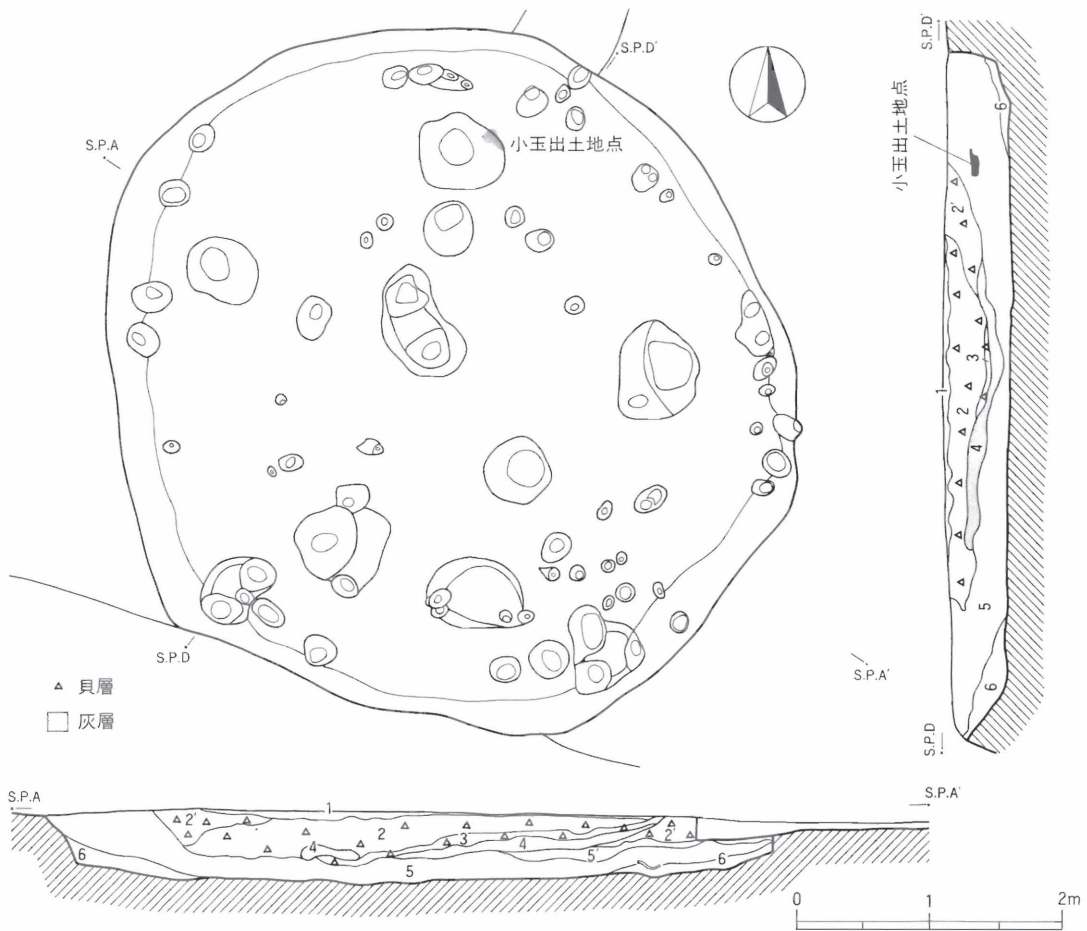
- |          |   |
|----------|---|
| 阿玉台式期住居  | 環のかなり外側にも散在する埋葬人骨が多い時期である。                                    |
| ↓        |   |
| 中峠式期住居   | 環の外沿部に分布し、住居内貝塚が多い時期である。                                      |
| ↓        |   |
| 加曾利E式期住居 | EII式を主体としており、土坑内には一部曾利系の土器も見られる。EIII式から出土量が減少し、中期末葉の土器は見られない。 |

この集落から更に西へ行くと緩やかな谷となり、弥生時代後期の集落が展開される。逆に縄文時代の遺構は全く無くなり、草刈貝塚がかなり限られた平坦地の中で構築されたことが窺われる。

### 4. 遺構について (第3図)

小玉が検出された住居址は、集落の外沿部北西側に位置し、中峠式期の土器を包含する貝層を持つ。周辺には数基の方形周溝墓が見られるが、縄文時代の遺構へ遺物が混入している様子は認められない。また住居の南北で確認されている溝は、恐らく一本につながるものと思われるが、非常に浅く確認面から底面まで約10cm程しかないので、住居の覆土上では確認できなかったほどである。

周囲で検出された住居はすべて縄文時代のもの、この近辺は特に貝層を持つものが集中して見られた。構築はかなりしっかりとしている方で、長径5.5m、短径5.0m、主柱穴の掘り込みは平均85cmと深く、床もよく踏みしめられている。南側の柱穴には一部貝の混入が見られたが、玉の出土地点下の柱穴では確認されなかった。



第3図 遺構実測図

### 5. 出土状況

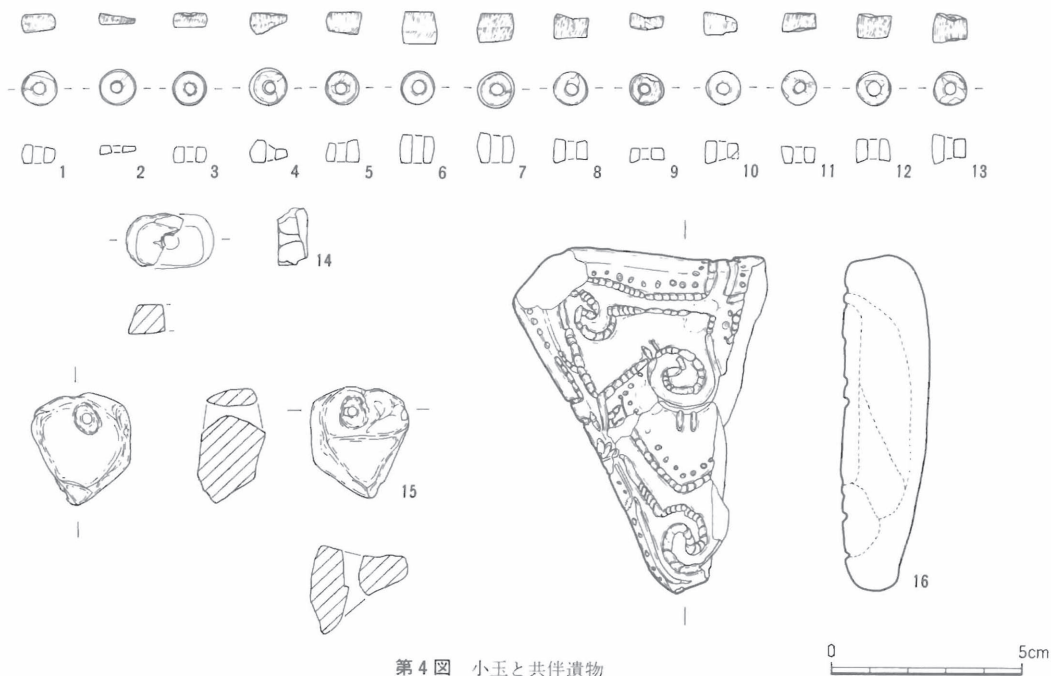
紹介する小玉は住居址の覆土中、貝層下より検出された。

覆土は、5層が大小のローム粒とロームブロックを大変多く含む暗褐色土で、4層の灰層を挟んで貝層が入る。5層は小玉が検出された層であり、遺物を最も多く包蔵する。ローム粒が混入する度合いから見て埋め戻した土であろう。ただし自然堆積土と思われる、ローム粒が少なく他よりやや色調の暗い6層が壁際に入るので、この住居が廃棄され埋め戻されるまで、いくらか時間の隔たりがあったものと思われる。4層の灰は白色で、厚いところでは10cm以上堆積している。炭化した獣骨片がまれに検出される以外は遺物が少なく、焼土が全く見当たらないので、他で出来た灰を入れたものと思われる。貝層は2層と3層に分けられ、2層はハマグリを主体とする混貝土層、3層はキサゴの純貝層である。

小玉は15×20cm、厚さ4cmの範囲内に36個分布し、ちょうど2層の貝層にパックされる形で出土した。5層中には何ら掘り込みの痕跡が認められないので、埋め戻しの際に一緒に入れたものと思われる。玉の周辺には、魚の小骨がわずかに散乱していた。

共伴遺物も内容が豊富で、小玉と同一の層からは琥珀玉二点（4図14・15）、三角形土偶（4図16）、貝輪三点（未製品を含む）が出土している。また住居全体では、1層から5層に亘って石器の剥片が170点と多量に出土しており、うち167点が黒曜石である。しかし製品はわずか4点と少ない。その他石囲い炉に転用したかと思われるような、磨石その他の破砕あるいは加熱された礫が、14点出土している。

以上のような出土状況から、小玉を縄文時代のもので判断した。ただし、大きさや形状で系譜的に追える資料は今のところ見当たらない。



第4図 小玉と共伴遺物

## 6. まとめ

出土した小玉は通称滑石と呼ばれる石材で出来ており、径約4.5mm、孔径約1.4mmと粒がそろっている。孔は垂直で両面穿孔か片面穿孔かは不明である。側面の擦痕がよく残っており、これは製作技法に依るものと思われる。

製作では、管玉状に整形したものを横割りして量産したような痕跡が見受けられる。表面は一見割り放しのようなのだが、ほとんどのものを擦って割れた面を整形している。こうした技巧的な面から見ると古墳時代以外に類例を求めることができない。今回の場合貝層の下から検出という出土状況が何よりの裏付けとなっており、逆にいえばどんなハプニングがあったとも限らないわけであり、帰属時期については慎重に考えたい。ただ精巧さや細かさという点では骨角器や石器を見るかぎり縄文人といえども高度な技術を持っており、まして硬度1程度の石を削り込むのは単に根気の問題である。石材も、中期には装飾品の原材として広く利用されているので問題はない。技術的に今のところ縄文時代に類例が見当たらないのは残念だが、量産を目的とすれば、さして特別な技法ではなかろう。問題は技術ではなく、こういうものに対して当時の人々が持っていたイメージで、大振りの珠が流行したのはその大きさに対する価値観

である。一方縄文時代中期の小玉の出土例は、点数は少ないものの各地で見られ、こうした小玉に対する価値観が当時もあったことが窺われる。

さて最後に、玉が検出された住居址について若干述べてみたい。

埋土と貝層の間に厚い灰層が入ることは前にも述べたが、こうしてしっかりとした灰層を持つ住居はH区で住居内貝塚14軒中3軒あり、どれも遺物が多く土器も大振りである。今回の住居址では覆土中の遺物は多量の石器剥片、使用済みの礫、そして貝や骨など日常食べたもの、いわば生活廃棄物の山である。そこに問題の小玉や琥珀玉、土偶など祭祀的な意味を持つといわれるものが混入しているところに、身近なものを対象とした「物送り」的な儀式を考えたい。

## 註

- 1) 「千原台ニュータウン1」 千葉県文化財センター 1980
- 2) 「千葉県の貝塚」千葉県文化財保護協会(1983)では、集落と南斜面を下切付貝塚、扇ヶ谷貝塚として記載されている。
- 3) 『玉』藤田富士夫1989 ニューサイエンス社「特集縄文土偶の世界」季刊考古学 他